

# 2021年 6月 13日(日) 関東学院教会 主日礼拝 説教要約

## 説教 「野の花のような生涯」 詩編 103編 高橋彰

### 103【ダビデの詩。】

わたしの 魂 よ、主をたたえよ。

わたしの内にあるものはこそって、聖なる御名をたたえよ。

2わたしの 魂 よ、主をたたえよ。

主の御計らいを何ひとつ忘れてはならない。

3主はお前の罪をことごとく赦し、病をすべて癒し

4命を墓から贖い出してくださる。

慈しみと憐れみの 冠 を授け

5長らえる限り良いものに満ち足らせ

6主はすべて虐げられている人のために

恵みの御業と裁きを行われる。

7主は御自分の道をモーセに

御業をイスラエルの子らに示された。

8主は憐れみ深く、恵みに富み、忍耐強く、慈しみは大きい。

9永久に責めることはなく

ここしえに怒り続けられることはない。

10主はわたしたちを、罪に応じてあしらわれることなく

わたしたちの悪に従って報いられることもない。

11天が地を超えて高いように

慈しみは主を畏れる人を超えて大きい。

12東が西から遠い程

わたしたちの背きの罪を遠ざけてくださる。

13 父がその子を憐れむように  
主は主を畏れる人を憐れんでくださる。

14 主はわたしたちを、どのように造るべきか知つておられた。  
わたしたちが塵にすぎないことを、御心に留めておられる。

15 人の生涯は草のよう。野の花のように咲く。

16 風がその上に吹けば、消えうせ  
生えていた所を知る者もなくなる。

17 主の慈しみは世々とこしえに、主を畏れる人の上にあり  
恵みの御業は子らの子らに

18 主の契約を守る人、命令を心に留めて行う人に及ぶ。

19 主は天に御座を固く据え

主権をもってすべてを統治される。

20 御使いたちよ、主をたたえよ

主の語られる声を聞き、御言葉を成し遂げるものよ、  
力ある勇士たちよ。

21 主の万軍よ、主をたたえよ

御もとに仕え、御旨を果たすものよ。

22 主に造られたものはすべて、主をたたえよ

主の統治されるところの、どこにあっても。

わたしの 魂 よ、主をたたえよ。

聖書 新共同訳(C) 日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987, 1988

「人の生涯は草のよう。野の花のように咲く」(15節)。この一節は、人間がはかなく、限りある存在であることを言います。しかし、この詩は人が生きることの虚しさではなく、喜びや平安、そして力強くさえ感じる魂の叫び、神への賛美の思いにあふれています。人は草、野の花のよう。神を信じたからと言ってその事実は変わりません。しかしそのはかなく限りある人間のいのちが、喜びや豊かな恵みに溢れたものだと見え、そのように生きることができることを、この詩はわたしたちに証しし伝えてくれているように思えます。それは「憐れみ深く恵みに富む神が、人間に対して恵み深くいてくださるからだ」というのです。それを思い出し、思いを深く知り、忘れないために、この詩は繰り返し神を礼拝する祈りと賛美の言葉として唱えられ、伝えられてきました。そして、詩の内容自体も、一人の人の癒しと赦しの体験と、そこから神を思い起こすことを通して広がる、神の恵みが神の民イスラエルの歴史において与えられた、広さ、長さ、豊かさを想い起こし、感謝と賛美にあふれるのです。

1-5節を見ると、詩人は自分自身の(体も心も含む存在としての)魂に呼びかけます。罪や病(肉体的病に限らぬ人が苦しみ破れを感じていること)にとらわれた自分が神によって、赦されて解き放たれた。墓と称される深い穴の中に落ち込み外の世界から断絶していた状態から救い出された。そして「鷺のように翼を広げ

て舞い上がる」(イザヤ40:31)らされ、魂が生き返るように新たにされたのです。この預言はバビロニア捕囚から解放されて主を信じてエルサレムに帰還する人びとへを励ました。

6-13節では、救いの体験がただ個人的な感覚なのではなく、神の慈しみと憐れみはイスラエルの歴史の出来事に根柢を持っていることを語ります。そしてその神がわたしをも救われるのだと、確信を持たされるのです。「主、主、憐れみ深く、恵みに満ちた神」は出エジプト記34:6,7で語られる神の顯現の言葉です。出エジプトとバビロニア捕囚からの帰還という出来事を導かれた神が、慈しみと憐れみを、「主を畏れる人」(11, 13, 17節…異邦人を指すともいわれる言葉です)に与えてくださっているのです。神を畏れ敬うから慈しみが与えられるというだけでなく、神の大きな慈しみがこの自分にも及ぶと知り、畏れずにはいられなくなるのです。そしてその神の恵みにしっかりと自分のいのち、人生を結び合わせて生きることを望むがゆえに、この詩を祈り賛美し続け、神の言葉を聞き、守り続けて行くことを願い、その言葉を行うのです。19節からは天の規模の壮大な光景を描きながら主を賛美して結びます。この壮大な神をわたし一人では賛美しきれない、だからこそわたしたちは世界中で神をほめたたる人びとに加わり礼拝するのです。